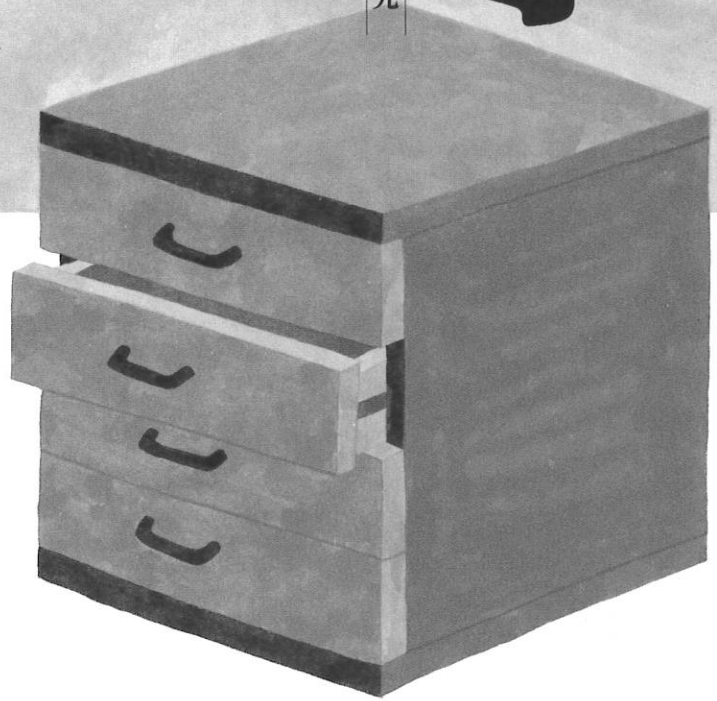
國文學 5

日本語・日本文学・日本文化 ―― 解釈と教材の研究

二〇〇八年 第五三巻七号

特集 翻訳を越えて

❖ 柳父 章「初めにことばがあった」
❖ 特別エッセイ 池内 紀「カフカ以前とカフカ」
❖ 河合祥一郎、飛田良文、荒このみ、高橋都彦、樋口覺 ほか



學燈社

國文學 5

❖ 特集 翻訳を越えて

國文學 解釈と教材の研究

平成二十年五月十日発行（毎月一回十日発行）第五十三巻第七号五月号
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 （通巻七六七号）

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五三巻七号 二〇〇八年五月号

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

懐かしい日本語辞典
佐藤・小杉編著 鷗外・漱石の時代の小説から奥床しく、現代でも新しい息吹を与える語句約八五〇語を厳選し、意味・用法を詳しく解説した。定価二七三〇円

日本語の文体・レトリック辞典
中村 明著 長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説定価三三六〇円

日本語・日本文学の研究に必携！
CD-ROM版 **鎌倉遺文** 古文書編 全四十六巻
竹内理三・東京大学史料編纂所編
あらゆる分野において実証的な中世史の研究には必須の根本史料である鎌倉遺文の古文書約三五〇〇〇余通を収録。平安・鎌倉時代文学の研究に有益な史料として提供する典籍でもある。また日本語学では文体・語彙の差異などの解明にも期待されている。検索は、キーワード・年・文書から選択・組み合わせができる。キーワード検索は地名・人名を入力すればすべての文書から検索が可能。詳細内容見本進呈 価格九四五〇〇円

CD-ROM版 **くずし字解読用例辞典**
山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

（価格は税込）

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1―17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

半世紀にわたる与謝野研究の集大成！
新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇
逸見久美 著 A5判上製・768頁・定価一二、六〇〇円
発売中 好評を博した旧版『評傳 與謝野鉄幹晶子』から32年、『与謝野寛晶子書簡集成』や『鉄幹晶子全集』の編集をつとめた著者がその成果をもりこんだ与謝野研究の決定版。具体的な作品や書簡資料の最新研究成果をふまえ、寛・晶子の生涯を描く。本書は寛と晶子の生い立ち・出会いから、『明星』の創刊から廃刊まで、新詩社の動向、『みだれ髪』刊行や寛の渡欧までの激動の明治期を収録。

日記の存在しない与謝野夫妻の日常をつぶさに語る明治25年河野鉄南宛寛書簡から晶子没年までの未公開書簡千三百通を含む二千百余通を収録
与謝野寛晶子書簡集成
逸見久美 編 全四冊完結 A5判・定価四三、四七〇円
第1巻 明治25年～大正6年 書簡416通収録・308頁
第2巻 大正7年～昭和5年 書簡557通収録・368頁
第3巻 昭和6年～10年 書簡534通収録・312頁
第4巻 昭和11年～17年・索引他 書簡601通・392頁
（①～③定価各一〇、二九〇円・④のみ定価一二、六〇〇円）

結婚後の心情を赤裸々奔放に詠んだ歌集を丹念に評釈
夢之華全釈〔晶子第六歌集〕 発売中
逸見久美 著 A5判上製・312頁・定価五、九一三円

八木書店 出版部
【呈詳細内容見本】＊定価は本体＋税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係迄
03-3291-2961〔FAX-6300〕http://www.books-yagi.co.jp

ISSN 0452-3016
雑誌 03787―5

4910037870582
01524

Printed in Japan

連載

心意伝承

―遊働世界に生きる―

第八回　夢の在りかを覓めて―境界認識の原像―④　四至結界の呪術

本荘雅一

聖域は生命指標のコンステレーション

NHK大河ドラマ「花の乱」で、足利義政に従う庭師の慨嘆する印象的なシーンがあった。義政と日野富子夫婦の間になかなか心がかよわない。義政は身は現世にありながらつねに浄土にばかり目が向き、富子は心が浄土にあって、そこからひたすら現世を見つめている。たがいに求める風景が異なっては、一つの庭に一緒にいてもすれ違うばかり……。

うーん。私も家内も、思わず唸って頷いてしまった。

私達は自分が生きるにふさわしい風景を求める。余暇には身も心も洗い直す期待をもって異界（異郷・異国）を訪れようとする。今住んでいる環境に違和感を感じるときこそ、自分が素直におさまる天地を強く求めてしまうのを自覚するだろう。ユートピアを妄想せずにはいられない。

かつての日本人が、託宣や夢に導かれて聖地は発見されると信じたり、聖地へ行けば神仏の霊威をこうむり、霊夢を授かれると信じたのも、生き物としての世界に支えられて自分も生かされている、という心意伝承を素直に受け入れていたからである。今も観光すなわち光を観るという言葉にその痕跡をとどめ、私達は異郷異界へと誘われる。

かろうじて、私達も夢の在りかを覓める生き方をしてはいるのである。

長谷寺のある大和泊瀬の地を中心に、聖なる領域に見られるイメージというものを考えてきた。山のたたずまい、夜、火、馬、馬の音、射目立て渡す狩り場、夢……。また、泊瀬という地名が示すごとく、そこは川の早瀬に洗われるみずみずしい地でもあった。

こうしたもろもろの景物が泊瀬の生命指標であり、それらが連関遊働をなしてその領域の聖性を実感させてきた。

おそらくは、一つの生活世界はもっとさまざまな気象景物が、その領域の生命力を発揮するコンステレーションを構成するのだろう。古典文学や民間伝承から、泊瀬領域の生命指標を一部すくいどりしてみたのが前回の話であった。

日本人の生活世界の知り方

ではそうして人々が邂逅い、ほだされたところの土地を、どのようにしてみずから住まう場所としたり、俗界と区別した聖地としたり、その他なんらかの目的を満たす空間としたのだろうか。

もう少し一般化して問うと、日本人が邂逅った場を、生活世界として獲得するためには、意識上どのようにして納得するべきものであったろうか。

夢とのかかわりで、よく取り上げられる事例が崇神紀四十八年春正月条にある。皇太子を決めるための夢占の場面だが、ここに日本人の世界定めの意識が現れていて、興味深い。

天皇、豊城命・活目尊に勅して曰く、「汝等二の子、慈愛共に斉し。朕夢を以て占へむ」とのたまふ。各夢みるべし。二の皇子、是に、命を被りて、浄沐して祈みて寝たり。各夢を得つ。會明に、兄豊城命、夢の辞を以て天皇に奏して曰さく、「自ら御諸山に登りて東に向きて、八廻弄槍し、八廻撃刀す」とまうす。活目尊夢の辞を以て奏して言さく、「自ら御諸山の嶺に登りて、縄を四方にはへて、粟を食む雀を逐る」とまうす。則ち天皇相夢して、二の子に謂りて曰く、「兄は一片に東に向けり。当に東国を治らむ。弟は是悉く四方に臨めり。朕が位に継げ」とのたまふ。

崇神天皇が、兄弟のどちらを皇位につけるか迷ってると言って、互いに夢を見るように指示した。斎戒沐浴して、二人は夢見をし、そして得た「夢の辞」を報告する。兄は「三輪山に登って、東の方へと八回ずつ、槍を突きだし、剣を振った」。弟は「三輪山の嶺に登って、縄を四方に張り巡らし、粟をついばむ雀を追い払った」。父天皇は「兄は東ばかり向いているから東国を統治せよ。弟は四方、即ちこの国全体なので、皇位を継げ」と

夢合わせした。

紀伊国（一説に尾張国）の豪族系の豊城入彦と、ニギハヤヒ系の活目入彦（のちの垂仁天皇）との皇位継承争いに関する議論は目的外なので措く。ここでは、皇位継承が夢託によって決められるという伝承自体を重視する。『記紀』で、皇位に就くための方法が述べられているのも、実はこれが最初だからである。

これ以前には天孫降臨のくだりで、アマテラスがニニギノミコトに「宝鏡奉斎」（書紀ではオシホミミノミコトにたいして）と「天壌無窮」の神勅を与える場面があるが、それは天子としての祭祀方法レクチャーと、国土統治を祝福するものであった。皇位継承者選定の仕方は、この崇神紀以前にはない。

しかしよくみると、これは「皇位継承」の話が統治領域確定の話にすり替えられているようでもある。にもかかわらず私達は余り疑いもせずに納得して読みすすんでしまうのである。

つまり私達には、生きる上での自分の位というものが、統治領域の確定によって定まるという意識があるのだ。

改めて言うまでもないが、日本人の統治とは〝治る〟ことであり、言い換えれば、広大無辺の天地に生活世界のイメージを得るには、その輪郭をなんらかの方法で〝知る〟必要があったということに他ならない。

その〝知る〟方法が、方向設定であった。武具・呪具を扱ったり、大地の稔りを守ったりといった内容は、二次的なものにすぎない。

あまりにも平凡な指摘だが、これが日本人にとってはきわめて重要かつ連綿と続く心意伝承を表すのである。

四至の唱えあげは呪術である

国・郡・郷、宮城や寺社、荘園、牧場など特定領域の東西南北四方の最果て、即ち四至を示すこと自体に、人々は何か威力を感じてしまう。

中世の寺社や荘園間などで行われた境相論で、境界標識である四至牓示という木杭などを引き抜く狼藉が発生したのも、そうした意識のあらわれである。四至を表現されるのは、厄介で目障りな威力を感じてしまうのであろう。

四至結界を表現することの効果をことさら強調しようとする事例は、実に延喜式（九六七年施行）記載の祝詞にまでさかのぼれる。巻の十六、陰陽寮に関する規定の部分にある、「儺の祭の詞」に、次のような句が見られるのである。「穢悪はしき疫の鬼の、処処村村に蔵り

隠らふるをば、千里のほか、四方の堺、東の方は陸奥、西の方は遠つ値嘉、南の方は土佐、北の方は佐渡より彼方の処を、汝等疫の鬼の住処と定めたまひ行けたまひて……」（『古事記　祝詞』岩波古典文学大系　四五九頁）。岩波本の頭注によると、これを十二月の末日に陰陽師が唱えるとあるから、年の窮まる境界時間に、国土の四至を唱えあげる呪言であったのだろう。

この場合は、いわゆる〝悪鬼〟を四至の境外に追いやるという呪能を期待してのものとなっている。これを祭祀として整備したのが四角四堺祭である。

四角祭りは宮城の四隅を祭場とするもの。四堺祭は、北陸・東海・東山・山陰・山陽の各道が山城国に入る境界地点であるところの、和邇（龍華）・逢坂・大枝・山崎（関土）で行われる祭祀である。

古代中世史研究の高橋昌明によれば、『西宮記』巻七延喜一四（九一四）年一〇月二三日条に「雷公祭」「四界祭」「四角祭」などが行われたとあるのが史料上の初見であるという（「境界の祭祀」『日本の社会史第2巻境界領域と交通』一九八七年　岩波書店）。

しかし後世、この四至結界の詞章は、必ずしも不都合なものを境外に追い出そうとする文脈ばかりではなく、他のさまざまな場面でも語られてくる。また国土の四至そのものも、それぞれ異なった地名があげられる。

細かく追究すれば、日本という国土の境界観の変化ということも考えられようが、むしろ現実の国境とは明らかに無関係な地名すら唱えられることもあるのを重視したい。つまり現実を圧倒する心的な現象を語る材料として、着目してみたい。

この四至結界の詞章は、いにしえの宮廷文学や史書ばかりでなく、縁起、随筆、祭りの囃子詞、歌舞伎脚本など、多岐にわたって使用される。要するに庶民感情に訴える資料のなかでこそ、いきいきと語られると言ってよい。

先行研究として管見に入るものを挙げておく。上原輝男『芸談の研究　心意伝承考』（一九七二年　早稲田大学出版）、『心意伝承の研究　芸能編』（一九八七年　桜楓社）、『かぶき十話』（一九九五年　主婦の友社）。大石直正「外が浜・夷島考」（『関晃先生還暦記念日本古代史研究』一九八〇年吉川弘文館）、「北の周縁、列島東北部の興起」（『周縁から見た中世日本』二〇〇一年　講談社）。村井章介「中世日本列島の地域と国家」（『思想』七三二号）。『アジアのなかの中世日本』（一九八八年　校倉書房）、「中世国家の境界と琉球・蝦夷」（『境界の日本史』一九九七年　山川出版社）。網野善彦『日本論の視座　列島の社会と国

家』（一九九三年　小学館）。石井進『日本の中世1　中世のかたち』（二〇〇二年　中央公論社）。

これらによってかなり網羅されていると思われる。なかでも心意伝承研究の上原は、こうした四至結界の詞章を、呪詞として見ようとした。古代の祝詞から近世の歌舞伎まで、「東は○○、西は△△……」の形式だけは崩そうとしないのであるから、その言い回し自体に特別な呪能を期待した生命指標であることは間違いないだろう。こうした四方の境界領域確定に、日本人は何を感じてきたのか、ということがよく表れている事例を、以下年代順に列挙していく。

源平騒乱をひき起こす夢

＊一四世紀頃成立『源平盛衰記』巻第十八　文覚頼朝勧二進謀反一（一九一〇年　國民文庫刊行會　四三五頁）

或夜の夢に藤九郎盛長見けるは、兵衛佐足柄の矢倉嶽に尻を懸けて、左の足には外の浜を踏み、右の足にては鬼界島を踏み、左右の脇より日月出て光をならぶ。伊法法師金の瓶子を懐きて進出、盛綱銀の折敷に、金の盃をすゑて進寄、盛長銚子を取て酒をうけ進れば、兵衛佐三度飲と見て、夢は覚めにけり。（傍線筆者）

同じ場面は一四世紀頃成立の『曽我物語』巻第二　盛長が夢見の事（岩波古典文学大系）、一五～一七世紀成立の幸若舞曲「夢合わせ」（『寛永版　舞の本』一九九〇年三弥井書店）にも語られている。

ゴジラやウルトラマンが米粒に見えるほど巨大な頼朝が、足柄の矢倉嶽に腰掛け、左足は陸奥の外が浜を踏み、右足は九州よりもさらに彼方の鬼界が島を踏む。のちに天下人になる者らしく、まことに雄大な光景である。

これは四至の形式を崩してはいるが、生命体の四肢というか、両足を伸ばして至るところ、国土の最果てを唱えているつもりではいるようである。しかも夢で与えられたイメージとして。

そしてこの後、流罪となった荒法師文覚に挙兵を勧められ、その文覚が福原まで出向いて牢の御所に押し込められた後白河上皇から院宣をせびり取り、頼朝に突きつけるといった展開となる。

要するに国土最果てに至る夢から、日本全土を揺るがす状況転換（トランスフォーメーション）が発動すると言いたげなのである。しかも上皇と頼朝とを結びつけるチャンネルの役目を果たす文覚が、実は長谷観音の申し子であったという逸話ま

で、『盛衰記』は添える。

こうして、大きな潮流を誘発しているのは、実は夢の霊験によるとするほうが、日本人は納得しやすかったのであろう。

曽我兄弟、鎌倉幕府を滅ぼす!?

＊一四世紀頃成立『曽我物語』巻第九　祐経にとどめさす事（岩波古典文学大系）

一旦かくれゐたりといふとも、東は奥州外濱、西は鎮西鬼界島、南は紀伊路熊野山、北は越後の荒海までも、君の御息のおよばぬ所あるべからず。天にかけり、地にいらざらん程は、一天四海のうちに、鎌倉殿の御権威のおよばざる所なし。（中略）むかふ敵あらば、太刀の目釘のこらゐん程は、命こそかぎりなれ。（傍線筆者）

建久四（一一九三）年五月二八日雨夜。富士の裾野の狩り場に野営する工藤祐経の館に夜討ちをかけて、曽我十郎・五郎兄弟は父親の敵討ちを果たした。しかし寵臣を失った将軍源頼朝からの討手は当然かかる。まして盛大に催された巻狩の期間中のことでもあり、鎌倉武士の主立った者はほぼすべてが集結しているのだから、彼等の面目にかけても狼藉者を捕らえねばなるまい。脱出自体が不可能であり、また仮りにその場はできたとしても、いずれ必ず捕らえられるに違いない。見苦しい恥辱である。

逃げるよりも、むしろ頼朝の本陣めがけて打って出ようと、弟の五郎が気炎を上げる。

そしてこの後、わざわざ大音声をあげて安眠をむさぼる武士達を驚かす。のちに全国のつわもの達を震撼させた、史上有名な曽我兄弟の十番切りが展開されるのである。このとき十郎二十二才、五郎二十才。

「たった二人の若武者によって、しかも一夜にして鎌倉幕府が滅ぼされたかもしれない」と、庶民の想像力がかき立てられないはずがない事件であった。

要するに、兄弟の超人的な立ち回りを起動させる呪言のようにして、この四至結界の詞章がここでは布置されているのである。

生き過ぎたりや廿五。大鳥一兵衛、江戸幕府を虚仮にする

＊一六一四年成立『慶長見聞集』巻之六　大鳥一兵衛

組の事（三浦浄心著。『日本庶民生活資料集成』第八　三一書房所収）

大鳥一兵衛とて名誉のをこの者、よにたのもしき知人あり。この人と盃をとりかはしたる若きもの、死生も知らぬ不敵なるあぶれもの、江戸市中に千人も二千人もあるべし。（中略）江戸御奉行衆聞召驚きさはぎ、先一兵衛をからめ、首がねをかけ、かなほだしを打、問注所におき、かれを見るに、餘の男に一かさ増さりて、足の筋骨あらくたくましうして、二王を作り損じたる形體なり。扨、同類あるべしとて、大名小名の家々、町中迄もさがし出し、首を切りてさらす事限りもなし。大名衆の子ども達をば命を助けて、奥州津軽はつぷ（合浦）そとの濱、西はちんぜい鬼海がしま、北は越後のあら海佐渡島、南は大しま、戸嶋、八丈江流し給ふ。（傍線筆者）

武家の主人が被官奉公人（「子ども達」）を一方的に斬罪するのが黙認されていたのに対して、主を異にして奉公する側の若党達が申し合わせ、殺された盟友の主人を殺害するという事件が相次いだ。滅私奉公の封建倫理を真っ向から断ずる若者達の反逆である。捕らえられた者は一様に首領格の大鳥一兵衛の志をたたえ、自分たちの勢力を誇示する始末であった。

事態を重く見た幕府は、江戸奉行衆総力をあげて大鳥組の一斉検挙に乗り出した。

こうして捕らえた者共のなかで、大名の被官については助命して四方最果ての地へ流したとある。その、傍線を付したくだりが、まさに古代中世の、四至結界の呪詞とほぼ同じなのである。

『古事類苑』法律部「遠島」の項を見ると、「御定書百箇条」を引いて、江戸期の配流地が列挙されている。それによると、江戸からの配流地は大島、八丈島、三宅島、新島、神津島、御蔵島、利島の伊豆七島。京、大阪、西国、中国からの配流地は、薩摩、五島之島々、隠岐国、壱岐国、天草郡とある。

したがって、一兵衛組捕縛の記事における四至結界の詞章のなかで、この時代の配流地であったことが確認できるのは、大島と八丈島だけということになる。つまり唱えあげられている地名の大半は、現実の流刑地ではなかったのだ。

にもかかわらず、この言い回しの呪術性が、ただならぬ霊威の発動を予感させ、誤謬の訂正すら許さずに著者三浦浄心をして事件を記録させたに違いない。その証拠のように、この記事の後には、大鳥一兵衛の超人性を示

すエピソードが列挙されてくるのである。

例えば、一兵衛がどんなに拷問されても平気でいるため、責めるほうも責めあぐねていると、一兵衛自身が己の懐旧談を始め、愛用の刀に「廿五迄いき過たりや、一兵衛」と切りつけてあることを披露する。のちに一兵衛が処刑された慶長十七（一六一二）年には、実際に二十五才であった（『徳川実記』国史大系　吉川弘文館）。

「生きすぎたりや」のフレーズも、当時の男伊達・傾き者達の矜持を示す生命指標だったかもしれない。

例えば熱田神宮の宝物館には、茎に「寛文八（一六六八）年」の銘とともに、「生過タリヤ廿五」と彫られた、奉納者不明の刀剣が収蔵されている。また伝岩佐又兵衛（一五七八～一六五〇）筆『豊国祭礼図屏風』（徳川美術館）のなかにも、朱鞘に金泥で「いきすぎたりや廿三」と記した大太刀を誇示する若者が描かれている。そのような若造が、「いい加減長生きしすぎた」と吐き捨ててみせるのである。

疾風のような生命燃焼を遂げる象徴的存在が、大鳥一兵衛であったろう。そうした民間心意が、「生き過ぎたりや」と一兵衛とを結びつけたかもしれないと思う。

また、責め続けられる一兵衛が、ようやく一味のすべてを白状するといって「百枚帳」を用意させるが、それになんと「日本国の大名衆を数へた」てて、完全に幕府を虚仮にしてみせるのであった。

もう一つ、一兵衛の母は子のないことを嘆き、武州大鳥の十王堂に十七日間籠もって「霊夢」を得、懐胎して十八ヶ月目に、鬼のような、恐ろしく逞しい子を産んだという。幼名十王丸。「其十王の二字を変じて、一兵衛と名付事、十萬地獄中唯有一兵衛、無二又無三の心なり」。

すなわち一兵衛も申し子であった。霊夢の所産という正体が、ここで暴露される形を取るのである。

四至結界の呪詞を伴うコンステレーションは、この時期には随分派手になると言わざるを得ないが、それだけに、現実を凌駕するごときイキのよい心意伝承が現れてくるとも言えよう。

曽我五郎、日本六十余州を引き寄せる

＊歌舞伎十八番のうち「矢の根」（一七二九年初演。『岩波古典文学大系　歌舞伎十八番集』所収）

〈食後の一睡一楽と、砥石を拭ひ無造作に、是れ邯鄲の枕ぞと、ふんぞり返ッて時致は」ヤットコトッチャアウントコナ」〈暫しまどろむ高鼻鼾、ゆたか

にこそは臥しにけれ」

〽アラ不思議や転寝の、片腹凄き風の足、舎兄十郎祐成、忽然と顕はれ出で、」十郎「いかに時致、我計らずも今日祐経が館へ擒となり、籠中の鳥網裏の魚、働かんに力なし。急ぎ来たりて急難を救ひくれよ。コリヤ弟、起きよ時致」〽起きよ五郎時致と、いふかと思へば忽ちに、消えて形ちは失せにけり」

〽時致夢さめ、むつくと起き、辺りを見れ共人もなく、茫然として居たりける」五郎「扨は夢中に兄祐成、念力通じて急難を、救ひくれよと告げたるか。譬はゞ祐経、天へ昇らば続ひて昇り、大地へ入らば同じく分け入り、日本六十余州は目の辺り、東は奥州外ヶ濱〇〽西は鎮西鬼界ヶ島」南は紀の路熊野浦〇〽北は越後の荒海まで」人間の通はぬ所〇〽千里も行ケ」萬里も飛べ〇〽イデ追駈けんと時致が、勢ひ進む有様は、恐ろしかりける次第なり。（傍線筆者）

この話は幸若舞曲「和田酒盛」から取材したものである。原話は『曽我物語』巻第六の前半部を占める。大磯の長者屋敷での酒宴の場で、曽我十郎祐成は、和田義盛、朝比奈三郎義秀親子ら一門に囲まれて孤立状態にある。当代きっての遊君虎御前の「おもいざし」の盃を、十郎が受けたことで招いた緊張状態である。兄の危機を察知した曽我五郎時致が単身駆けつけ、威風辺りを払って相手方を圧倒するという筋。

それが歌舞伎の「矢の根」においては、兄弟の親の仇工藤祐経の館に、十郎が取り込められているという設定になっている。現代のヒーローマンガの原形はここに完成していると言ってよい。

ここで引用した場面について、『曽我物語』では五郎の胸騒ぎによって馬を飛ばす筋であるが、「和田酒盛」では夢告が介在するようになる。そして「矢の根」において四至結界の呪言が加わり、庶民感情の上で一応の結着を見るのである。

まず注目したいのは、四至を唱える前に「日本六十余州は目の辺り」と述べていることである。つまり現実の距離、現実の空間座標を崩してしまうことを予告し、その効能のように、四至を唱えあげている。

上原輝男はこれを「霊的呪詛的世界の招来」（『芸談の研究　心意伝承考』二六四頁）と見る。「この咒言によって東西南北四方最果ての地は招来され、そこにひしめく亡魂怨念は寄せ集められることによって、この咒言を唱

える者自体は怨霊化し、当然この場自体が見立てられた特定の霊的空間たりうるのにちがいない」（『心意伝承の研究芸能編』桜楓社　三一二頁）とも述べる。

単に国土の四至境界を列挙しているのではなく、頼朝の夢のように巨大拡張することもあれば、最果ての世界をこの場に引き寄せてしまったりもするのである。それは当然現実世界のヴィジョンではなく、霊的とでも表現するしかない、特殊時空（トランスフォーメーション）への転換なのであった。

山が夢をもたらす演出

ちなみにこの芝居の舞台は、正月という設定である。であるから五郎が見た霊夢は、正月の初夢ということになるのだが、その前に五郎は、浄瑠璃演奏者の大薩摩太夫からもらい受けた、初夢の縁起物、「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな（長き夜の十の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな）」という、上下どちらから読んでも同じ文になる回文歌の記された宝船の絵を、砥石の下に敷く。それを枕にして寝るという形を取るのである。

演劇評論家落合清彦の解説によると、「この太夫は今は役者が演じているが、昔は本当に出語りの大薩摩の太夫が演奏台から降りて行った」（『図説日本の古典　歌舞伎十八番』一九八八年　集英社　七八頁）らしい。

オペラでいえば、舞台下の楽団の一人、コンサートマスターあたりが劇の途中で舞台に這い上がって主役にクリスマスカードでも渡すような、あり得ない演出である。

その大薩摩太夫が乗っていた演奏台のことを、「山台」という。

ここにもまた、山が夢をもたらすという心意伝承が具象化しているではないか。そのためには、一つの完結した時空を穿って現れる異界存在の往来までが示されているというわけだ。

「矢の根」において五郎が鏃（やじり）を研ぐのは、敵討ちに使う道具の手入れということではなく、霊夢のような神意を諮（はか）る、忌（い）み籠（ごも）りの儀礼ではなかったかと思えてしまう。

崇神紀の二皇子も、「浄沐」して「祈寝」するとあったように、呪術によって夢を獲得したわけだが、彼等の夢に共通していたのは、「御諸の山に登りて」であったことや、豊城入彦の槍・剣を振るイメージが、改めて想起されるのである。

五郎の夢見は、その行為自体が「荒事（あらごと）」であるよう

に、こうした、山の霊験「あらたか」を示しているのである。したがって、この芝居が正月狂言であるのも、正月だから主役に夢を見させたり、舞台の背景に大きな富士を設置してめでたさを強調した、ということではあるまい。逆に、このような恐るべき夢見の霊験あらたかとして、正月という時空が招来されたと、人々は感じ取ったのではなかったか。

生活空間の安定に必要なのは世界遊働のイメージ

四至結界の呪詞は、近代以前に実に千年もの間、日本人にとっては特殊印象の出来事とのコンステレーションを結び続けてきたのである。近世の演出はいささかオーバーヒートしたものではあるが、それだけに民間心意の鉱脈に滾るものをはっきりと自覚させてくれた。

この呪術は、都合の悪いものを掃討するのが根本ではあるまい。内と外との相対化自体が、二次的なものと言える。四方境界の設定が、居住空間の生命力を明らかなものとする。私達は身を位置づける結界を知ることで、わが生命の増強も果たせたのである。

崇神紀の二皇子の夢にしても、まずは方位を招いたものと読んでみるべきではなかろうか。自分が動くというよりも、世界が遊働し、やって来るという感覚が先ではなかろうか。地鎮祭は土地の荒ぶる神を鎮めるものとされているが、鎮魂を古来「たまふり」と訓むように、もとは土地の威力霊力を奮い立たせるものではなかったか。

確かな生活世界獲得の保証として、日本人は夢のお告げを見つけた。覚醒時の判断にはどうしても適切不適切の分別がつきまとうが、夢のヴィジョンにはそうした対立を超越した絶対性がある。

四至の唱えあげは、ことさらその場の威力を感じ取り、あるいは世界の遊働を感じ取ろうとする、生命力増大を期待しての呪術であった。四至の形式が大事なのではなく、方向と最果てのイメージを獲得することが、世界定めの極めて強烈な印象を、心に仕組むことになる。方位や地名といった生命指標を、いかに意識世界として仕組むかの問題であろう。

仕組み方がコンステレーションであり、それによって、天地風景の生命力も実感できる。「四方」が高級で、「一方」が低級などということではない。生気（霊気）にあふれ、それが雲散霧消してしまわないような完結性を伴ったところが、私達にとって生活世界たりうるのである。

學燈社からのお知らせ

「國文學」では、一般の皆様からの投稿原稿を募集しております。掲載は月に一点、その号のテーマに沿った内容であれば、エッセイ・論文等形式は問いません。以下に応募要項をご案内いたしますので、どうぞ奮ってご応募ください。

【募集要項】

原稿テーマ　「地方文学」について
原稿掲載号　「國文學」二〇〇八年七月号（六月十日発売）
原稿枚数　四百字詰め原稿用紙換算二十枚
原稿〆切り　二〇〇八年五月七日（水）必着
原稿形態　メールに原稿を添付して指定のアドレスまでご送付ください。
また、手書きの原稿等に関しては郵送でお願いします。
（原稿の返却はいたしかねますので、必ずコピーをおとりください）

応募資格　特になし。年齢、性別、職業等一切問いません。

※応募の際は必ず住所・氏名・電話番号をご明記ください。
掲載の方にのみご連絡させていただきます。ご了承ください。

あて先　gaku-henshubu@mtg.biglobe.ne.jp
または、〒一一二―〇〇一四　東京都文京区関口一―四七―一二
學燈社「國文學」編集部　担当　大島宛

問い合わせ　〇三―五二二八―七一五八（担当　大島）